



# 居候

1月5日

Sudden Fiction Project

高階經啓  
hirotakashina

## 1月5日のおはなし「居候」

---

「生き急いではいけない。いずれ必ず死ぬ。今は実感を持ってなくともそれが決まり事なのだ。イヤだと言おうが何しようが誰もがいずれ必ず死ぬ。言うまでもないことだが死は恩寵でも罰でもない。行き着く先としてあらかじめ定められただけのものだ。いわば単なるゴール単なる前提に過ぎないんだ」

そんなことを急に言われても困ってしまう。掃除をしながら私は考える。それにしても失礼なやつだ。ソファの上にふんぞり返って、その態度いったい何様のつもりなの？　そもそも何の権利があってこの家に住み着いているんだろう？　そうだ。そろそろ出て行ってもらってもいいんじゃないかな。

上目遣いに私は様子をうかがう。有頂天になって自分の話に酔ってあいつはいつもの通りご機嫌な様子だ。うつむいて手元のノートにペンを走らせる様子。うっかり私は少し長く見つめすぎてしまう。嬉しそうな表情を見れば曲を思いついたんだってことがわかる。「うん？」という様子で彼は顔を上げる。憂いを含む目で私を見つめ返し左の眉をびくりとあげる。「ううん、何でもなし」とつぶやいて掃除機をかけながら私には彼を追い出せないことがわかってしまう。

ロマンチックなことなんかなんにもない。ろくでもないのに引っかかったと自分でもわかっている。浪人するとき有名進学塾に通うからと親をだまして東京に出てきて見つけた部屋に彼はいた。ロッカーと自称していたけどそんな大層なものじゃないに決まっている。ろくに日も当たらないこんな部屋に縛り付けられているんだもの。ろうそくの炎のような不確かな輪郭しか持たない影の存在。老化に悩まされることも死を恐れることもない。603号室に永遠に住み続ける呪われた居候。

うなじに触れられ私の身体から力が抜けて行く。「うんと気持ちのいいことをしてやるよ今日は」「鬱陶しいなあもう」と口では言うけれど声がかすれてしまう。うなだれる私に彼をはねのける力はないしはねのける気もないんだ本当は。うわずった声が出そうになるのをこらえながら私は掃除を続ける振りをする。海原をゆっくり大きくうねるような波が押し寄せてきて私はほとんど立っていることさえできなくなる。うずくような苦痛と快感に満たされてその場に崩れおれると私は大きく声を上げてしまう。「裏切ろうなんて思うなよ」と彼の声が頭の中で響く。内側から私は居候に支配される。

(「居候」 ordered by マーチン--san/text by TAKASHINA, Tsunehiro a.k.a.hiro)

## 感謝の言葉と、お願い&お誘い

---

Sudden Fiction Project（以下SFP）作品を読んでいただきありがとうございます。お楽しみいただけましたでしょうか？ もしも気に入っていただけたらぜひ「コメントする」のボタンをクリックして、コメントをお寄せください。ブログへの登録（無料）が必要になりますが、この機会にぜひ。

「気に入ったけどコメントを書くのは面倒だ」と言うそのあなた。それでは、ぜひ「ツイートする（Twitter）」「いいね！（Facebook）」あたりをご利用ください。あるいは、mixi、はてな等の外部連携で「気に入ったよ！」とアピールしていただくと大変ありがたいです。盛り上がります。

※星5つで、お気に入り度を示すこともできますようですが、面と向かって星をつけるのはひょっとしたら難しいかも知れませんね。すごく気に入ったら星5つつける、くらいの感じでご利用いただければ幸いです。

現在、連日作品を発表中です。2011年7月1日から2012年6月30日までの366日（2012年はうるう年）に対して、毎日「1日1篇のSFP作品がある」という状態をめざし、全作品を無料で大公開しています。→[公開中の作品一覧](#)

SFP作品は、元作品のクレジットをきちんと表記していただければ、転載や朗読などの上演、劇団の稽古場でのテキスト、舞台化や映像化などにも自由にご活用いただけます。詳しくは「[Sudden Fiction Project Guide](#)」というガイドブックにまとめておきました。使用時には、コメント欄で結構ですので一声おかけくださいね。

ちょっと楽屋話をすると、7月1日にこのプロジェクトを開始して以来、日を追うごとにつくづく思い知らされているのですが、これ、かなり大変なんです（笑）。毎日1篇、作品に手を入れてアップして、告知して、[Facebookページ](#)などに整理して……って、始める前に予想していたよりも遥かに手間がかかるんですね。みなさんからのコメント、ツイート（RT）、「いいね！」を励みにがんばっていますので、ぜひご協力お願いいたします。

読んでくださる方が増えるというのもとても嬉しい元気の素なので、気に入った作品を人に紹介して広めていただけるのも大歓迎です。上記Facebookページも、徐々に充実させてまいりますので、興味のある方はリンク先を訪れて、ページそのものに対して「いいね！」ボタンを押してご参加ください。

10月からは「1日1篇新作発表」の荒行（笑）を開始し、55作品ばかり書き上げる予定です。「[急募！お題 この秋Sudden Fiction Project開催します](#)」のコメント欄を使って、読者のみなさんからのお題を募集中です。自分の出したお題でおはなしがひとつ生まれるのって、ぼくも体験済みですが、かなり楽しいですよ！ はじめての方も、どうぞ気軽に遠慮なくご注文ください（お題は頂戴しても、お代は頂戴しないシステムでやっています。ご安心を）。

こんな調子で、2012年6月30日まで怒濤で突き進みます。他にはあんまりない、オンラインならではの風変わりな私設イベントです。ぜひ一緒に盛り上がってまいりましょう。

## 居候

<http://p.booklog.jp/book/41703>

著者 : hirotakashina

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/hirotakashina/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/41703>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/41703>

公開中のSudden Fiction Project作品一覧

<http://p.booklog.jp/users/hirotakashina>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのpapier ( <http://p.booklog.jp/> )

運営会社 : 株式会社paperboy&co.